

2025年度 藻場 Algal Beds

はじめに

我が国の沿岸域は、磯、干潟、アマモ場、藻場及びサンゴ礁に代表される生物多様性の高い貴重な生態系を有しています。

私たちは、これらの生態系から魚介類や海藻などの食料を得るとともに、これらの生態系を潮干狩りや観察会などの余暇や教育活動の場としても利用しています。また、これらの生態系は、水質の浄化作用、台風等による高波を防ぐ作用、二酸化炭素を吸収する作用などを通じて、私たちの生活基盤を支える上で重要な働きを担っています。

「藻場」とは？

海藻類（緑藻、褐藻、紅藻）が群生した生態系のことを示します。ホンダワラ類、アラメ・カジメ類、コンブ類など、様々な藻場があります。

藻場は、我々にとって産業上重要な場であるだけではありません。沿岸域の様々な海洋生物にとっても主要な生産の場です。生息・採餌・産卵の場所として藻場が利用されるため、生物多様性の極めて高い生態系であると言えます。

竹野サイト（兵庫県）

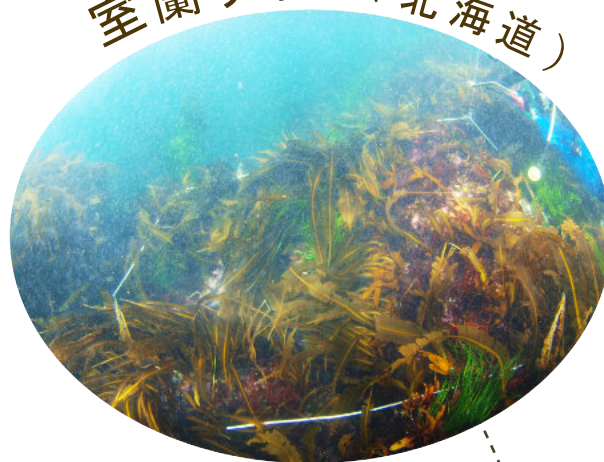


藻場調査

2008年度から「毎年調査」と「5年毎調査」の2つの調査により、各サイトの海藻の種類や被度の変動から藻場の長期変化をとらえ、自然環境保全のための基礎情報を得ています。

2025年度の調査では、日本沿岸の6箇所のサイトで18度目の毎年調査を実施し、各サイトの定点で藻場を構成する主な海藻種の被度や生物量などを調べます。

室蘭サイト（北海道）



速報掲載更新履歴

☑	2026. 3. 25	伊豆下田サイト	▶ Link
☑	2026. 3. 13	室蘭サイト	▶ Link
☑	2026. 3. 13	志津川サイト	▶ Link
☑	2026. 3. 13	竹野サイト	▶ Link
☑	2026. 3. 13	淡路由良サイト	▶ Link
☑	2026. 3. 13	薩摩長島サイト	▶ Link

志津川サイト（宮城県）



伊豆下田サイト（静岡県）



淡路由良サイト（兵庫県）



薩摩長島サイト（鹿児島県）



参考情報

- ☑ モニタリングサイト1000 藻場 調査の調査項目と内容 ▶ [Link](#)
- ☑ 2024年度モニタリングサイト1000 藻場 調査速報 ▶ [Link](#)
- ☑ 2024年度モニタリングサイト1000 アマモ場・藻場 調査報告書 ▶ [Link](#)
- ☑ モニタリングサイト1000沿岸域調査 磯・干潟・アマモ場・藻場 2008-2022年度とりまとめ報告書 ▶ [Link](#)

室蘭サイト

- 北海道室蘭市 -

- ▶ 内浦湾に面したチャラツナイ浜の岩礁海岸です。
- ▶ 後背地は急峻な崖で、間隙水を除いて大きな流入河川はありません。海底の底質は岩盤または岩塊で、沖合 100m で水深 - 5m 前後となります。
- ▶ 季節ごとに千島寒流と津軽暖流の流入が変化するため、コンブ目を中心とした多様な海藻植生が見られます。また、スガモ（海草：海産顕花植物）もパッチ状に混生しています。



▲ スガモ：マコンブ群落の周辺には、海草（うみくさ）のスガモがパッチ状に混生しています。



▲ 永久方形枠Eの様子：6つの枠の中で最も波当たりとうねりが強く、この場所だけ例年チガイソが繁茂しています。一般的に、チガイソはマコンブよりも波当たりの強い場所が多く見られます。

調査結果概要

調査サイト内には、6つの永久方形枠（A～F）を設置しています。毎年調査では、永久方形枠内に生育する海藻の種類や被度を調べています。また、岸から沖に向かって100mの調査ラインを設定し、水深変化に沿った海藻の種類や被度も調べています。

今年度の調査では、マコンブを主体とした植生が例年通り確認されました。永久方形枠調査において、マコンブの被度は枠A（写真c）及びC、Dで100%、枠Bで75%に達していました。枠Fでは、一昨年度までマコンブの被度が100%でしたが、前年度にはマコンブの被度が50%となり、ワカメが被度30%で加入しました。この植生の状況は、今年度も同様でした。また、枠Dにおいても、2019～2023年度までマコンブがほぼ100%の群落でしたが、2024年にワカメが40%で加入しました。

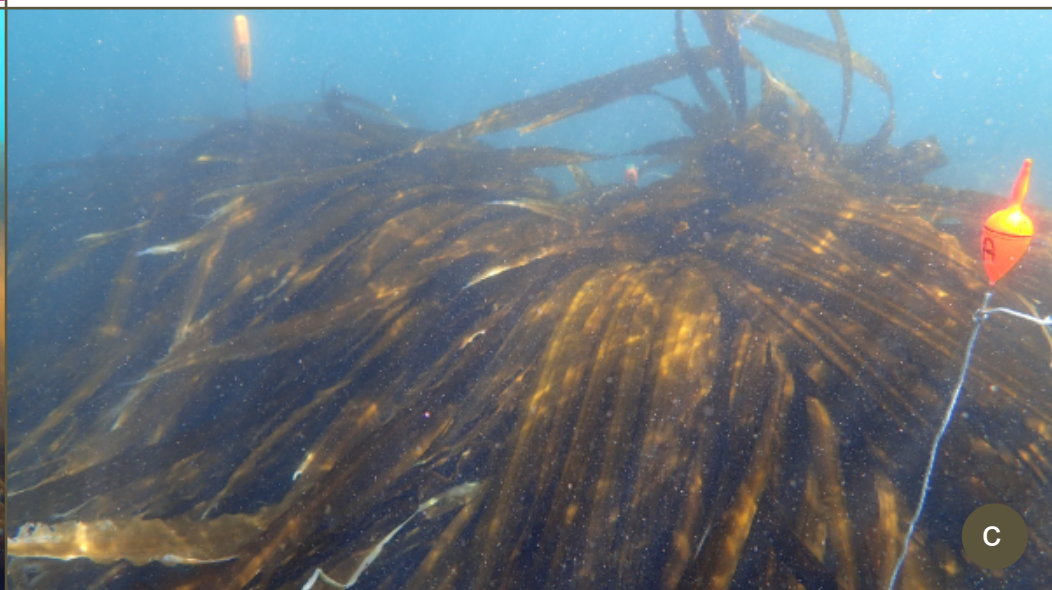
ライン調査では、永久方形枠に近いラインの30～70m地点の範囲で、高密度なマコンブ群落が見られました。しかし、ライン75m地点ではマコンブは岩塊上のみで生育が限られており（写真e）、さらに80mより沖側では、マコンブは岩塊上にも見られず、磯焼けと呼ばれる状態になっていました（写真f）。



▲ ライン75m地点のマコンブ：マコンブ群落の沖側では、岩塊の上のみマコンブが点在していました。



▲ マコンブ群落：群落の内部では特にマコンブの密度が高くなり、被度は多いところで100%に達しています。



▲ 永久方形枠Aの様子：マコンブは概ね例年通り繁茂していました。この枠は岸に近いマコンブ生育帯に設けられており、波のうねりによってマコンブを食べるウニ類が近寄れないためと考えられます。



▲ マコンブ群落よりも沖側の様子：マコンブ群落の沖側は、無節サンゴモが繁茂する「磯焼け」と呼ばれる状態になっていました。以前は、この場所にもマコンブやハケサキノギリヒバが見られましたが、現在では全く見られなくなりました。

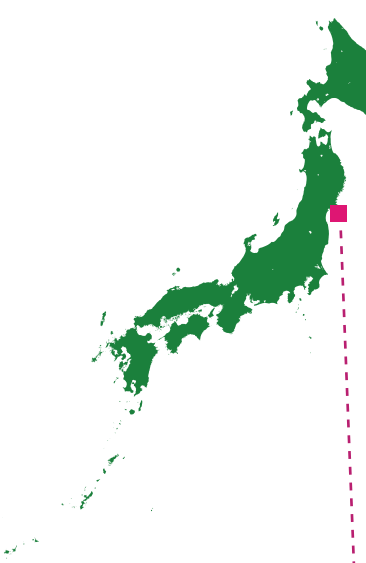
調査日 2025. 7. 23
サイト代表者：長里千香子
(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)

調査者・調査協力者（所属）【写真撮影】
寺田竜太（鹿児島大学）【a,b,e,f】
渡邊裕基（三重大学）【c,d】
橋本 樹（日本海洋生物研究所）
岸林秀典（日本海洋生物研究所）
市原健介（北海道大学）
寺内菜々（北海道大学）
外崎いづみ（北海道大学）
山田美幸（北海道大学）

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2025年度藻場調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/moba_2025.pdf)

これまでの藻場調査の報告書はこちら。
<https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
これまでの藻場調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_algalbeds.html

志津川サイト - 宮城県南三陸町 -



- ▶ 三陸の典型的なりアス海岸の中にあり、志津川湾に浮かぶ椿島の太平洋側に面した藻場です。
- ▶ 2011年3月の巨大地震直後の急激な地盤沈下とその後の緩やかな地盤隆起により、調査海域の水深が変化しています。
- ▶ 岸寄りではエゾノネジモクが優占していますが、アラムが主体の群落です。地盤沈下の影響でアラムの分布が岸側で拡大しましたが、両種が混生する部分では、エゾノネジモクが増加する傾向も観察されています。



▲ 岸側の永久方形枠 (D, E) : 2014年度にアラムとエゾノネジモクの混生群落の中に設置した方形枠です。主に両種の被度の変化に着目して観察を続けています。



▲ エゾノネジモク: アラムとともに志津川サイトの藻場を代表する褐藻のヒバマタ目の海藻です。付着器に加え海底を這う茎からも付着する器官が生じ、波当たりの強い環境でも岩にしっかりと固着して生育できる能力を持っています。

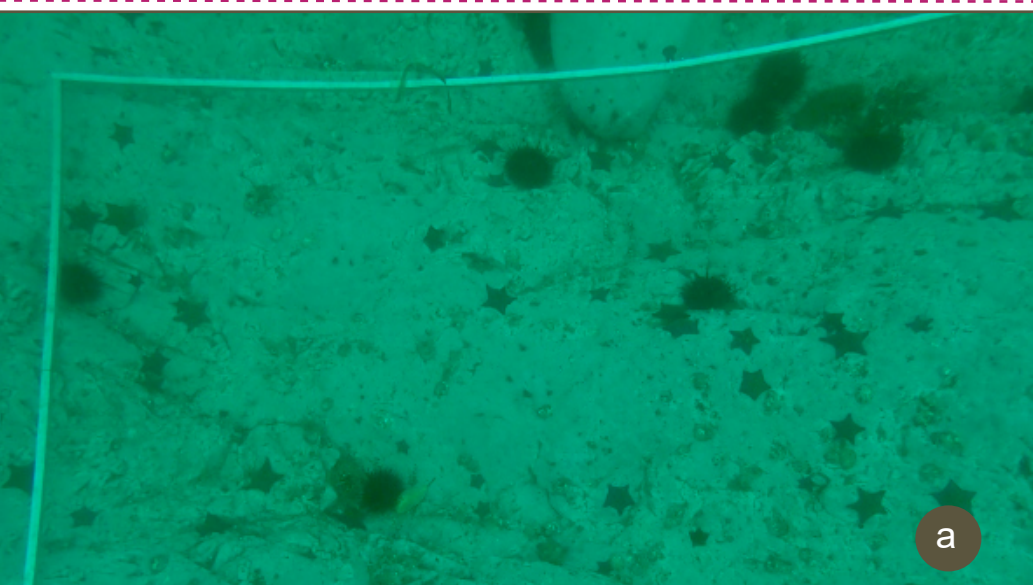
調査結果概要

調査サイト内には、5つの永久方形枠 (A~E) を設置し、枠内の海藻の種類や被度を調べています。枠A~C (写真a) は2008年度に分布水深の下限付近のアラム群落内に、枠DとE (写真b) は2014年度に枠A~Cよりも水深の浅いアラム (写真c) とエゾノネジモク (写真d) の混生群落内に設置されました。また、永久方形枠調査とともに、岸から沖に向かって調査ラインを設定し、水深変化に沿った海藻の種類や被度も調べています。

枠A~Cでは、アラム群落の消失が確認された2014年度以降、植生が回復しない状態が続いています。枠DとEでは、今年度も混生群落が確認できましたが、アラムが減少していました。また、前年度に高頻度で観察されたエゾノネジモク藻体の異変 (枝の欠損およびヒドロ虫の付着) は見られませんでした。



▲ アラムの幼体: 褐藻のアラムの幼体です。藻場及びその周辺の海底では、写真のような次世代のアラムを観察することもできます。



▲ 沖側の永久方形枠 (A~C) : 2008年度にアラム群落の下限水深付近に設置しました。現在は写真のようにアラムがない状態が続いていますが、海洋環境や植食動物の変化によりアラム群落に戻ることも想定されるため、調査を継続する必要があります。



▲ アラム: 志津川サイトの藻場を代表する褐藻のコンブ目の海藻です。アワビやウニ等の有用な水産資源を含む様々な動物に餌とすみかを提供しており、沿岸域生態系の基盤となっています。



▲ スガモ: アラムやエゾノネジモクのような海藻ではなく、アマモと同じ海草 (うみくさ) の仲間です。アマモは砂泥域に生育しますが、スガモは岩礁域に生育します。枠D, Eやその周辺で観察することができます。

調査日 2025. 7. 5
 サイト代表者: 阿部拓三
 (南三陸町自然環境活用センター)

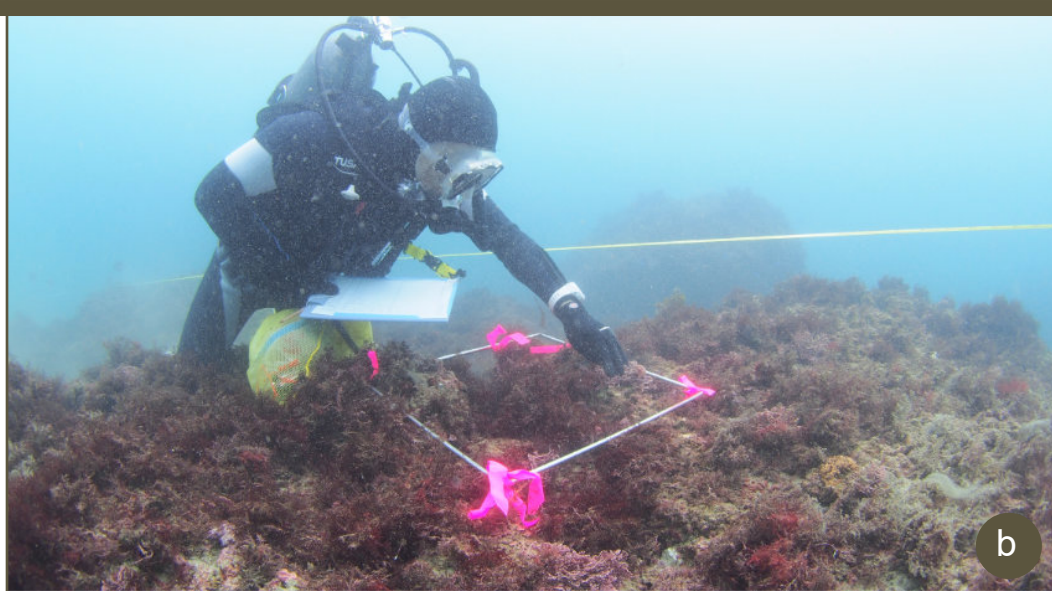
調査者・調査協力者 (所属) 【写真撮影】
 青木優和 (東北大学) 神谷充伸 (東京海洋大学) 太齋彰浩 (サステナビリティセンター) 【a】
 阿部拓三 (南三陸町) 倉島 彰 (三重大学) 上野綾子 (WIJ)
 鈴木将太 (南三陸町) 田中次郎 (東京海洋大学) 【f】
 鈴木はるか (東北大学) 坂西芳彦 (日本藻類学会) 小玉志穂子 (アリエル) 【b,c,d,e】

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
 出典: モニタリングサイト 1000 2025年度藻場調査速報 (環境省生物多様性センター)
 (https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/moba_2025.pdf)

これまでの藻場調査の報告書はこちら。
<https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
 これまでの藻場調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_algalbeds.html

伊豆下田サイト - 静岡県下田市 -

- ▶ 伊豆半島南東岸にある下田湾の支湾に位置し、外洋に面した藻場です。
- ▶ 本サイトは前面に大きな岩礁があるため波浪の影響を受けにくい一方で、海水の流動が活発であるため透明度が高い海域です。
- ▶ 温帯性コンブ目のカジメとアラム、ホンダワラ類が混生する藻場でしたが、2022年からは、ほぼ小型海藻のみとなりました。



▲ ライン調査の様子：写真の調査地点周辺では、2017年度以前にカジメやホンダワラ類の藻場が広がっていましたが、現在は消失して小型海藻だけとなり、フサカニノテ等の有節サンゴモやマクサが目立ちました。

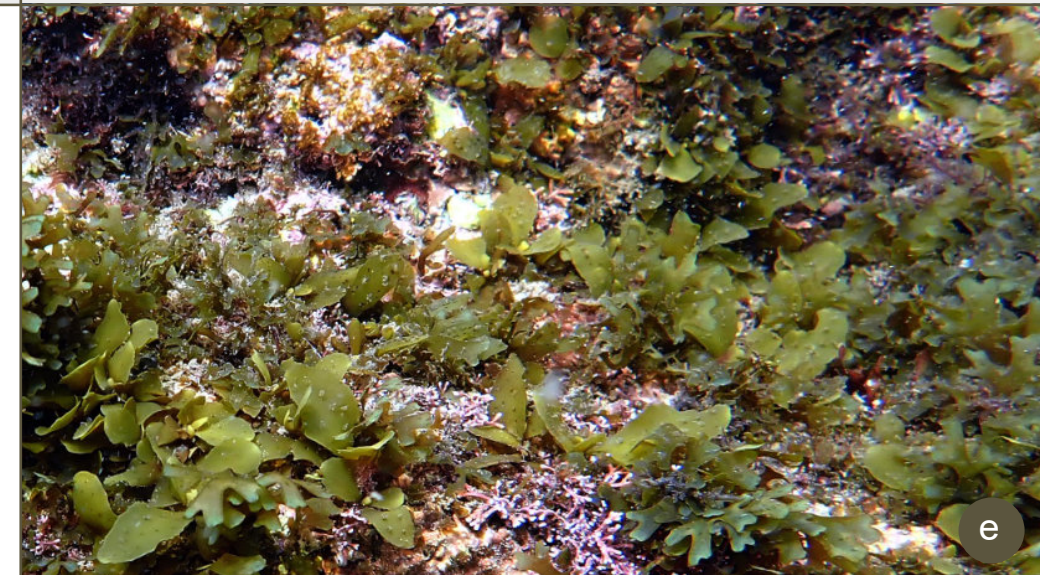
▲ 紅藻のカニノテ：小型海藻の本種は有節サンゴモの一種です。これらの小型海藻は、2023年度以降に永久方形枠内やライン上で多く見られるようになりました。

調査結果概要

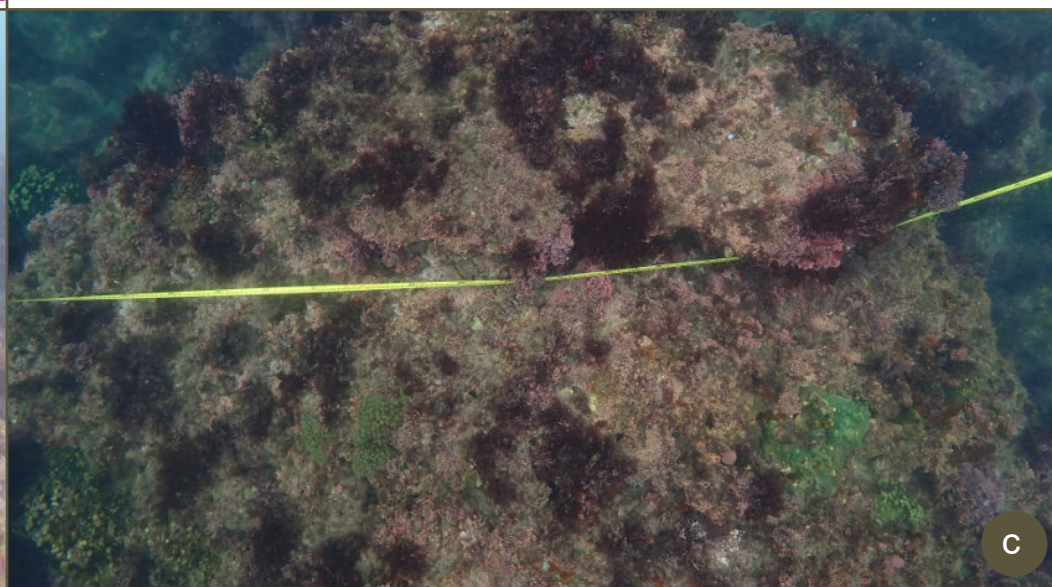
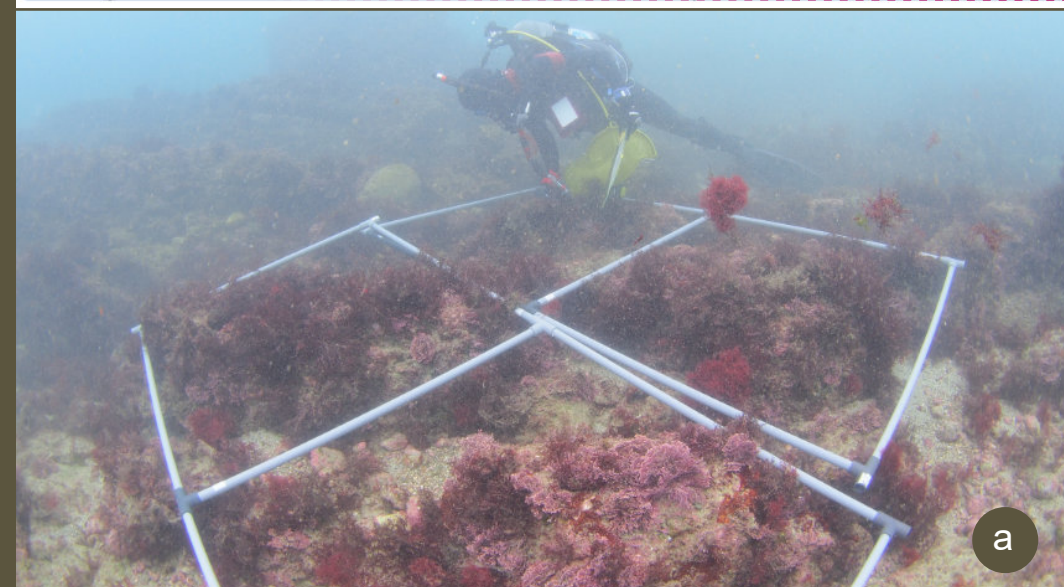
調査サイト内には、3つの永久方形枠（A～C）を設置しています。毎年の調査では、永久方形枠内に生育する海藻の種類や被度を調べるとともに、岸から沖に向かって調査ラインを設定し、水深変化に沿った海藻の種類や被度を調べています。

本サイトでは、2018年度からカジメとアラム、ホンダワラ類が減少し、2022年度以降にはサイト周辺からも完全に消失しました。その後、それらの大型海藻に代わり、小型海藻のカニノテ等の有節サンゴモ類やマクサが目立って見られるようになりました。

今年度のライン調査では、ライン上に出現した海藻の種数は17種であり、2009～2017年度までの平均24種を下回っていました。一方、永久方形枠調査では、枠内で出現した下草の種数は19種となり、2009～2017年度までの平均11種より増加していました。大型海藻消失の要因は、2017年から始まった黒潮大蛇行による冬季の高水温と、それに伴う植食性魚類の摂食活動の活発化と考えられます。なお、2023年度までは、サイト周辺にブダイやアイゴなどの植食性魚類が多数見られましたが、前年度と今年度の調査では、ほとんど見られませんでした。



▲ ライン0m地点（起点）で見られたイソモクの幼体：本サイトでは、カジメやホンダワラ類等の林冠構成種がほとんど姿を消しました。しかし、今年度の調査では、海面のすぐ下のライン0m地点にのみ、ホンダワラ類であるイソモクの幼体が確認されました。



▲ 永久方形枠調査の様子：調査開始当初にカジメ海中林の内に設置した枠ですが、2022年度にカジメは完全に消失し、2023年度からは付着器等の痕跡も消えました。今年度は、前年度に引き続き、マクサや有節サンゴモの他、ユカリ等の小型海藻が多く見られました。

▲ ライン起点から25m地点の様子：ピンク色の部分は有節サンゴモと無節サンゴモ、濃紅色の部分はマクサ、緑色の分はサンゴとサンゴイソギンチャクです。この付近の海底の大部分は、この3つのグループで占められていました。

▲ 海中を漂うキヌイトカザシグサ：繊細で美しい紅藻の一種です。今年度の調査では、ラインや永久方形枠の周辺に、本写真の様な寄り藻が多く集まっている場所があり、本種の他に、トサカノリやヒラクサ、タマイタダキ等の深所に生育する海藻が見られました。

調査日 2025. 9. 29
サイト代表者：倉島 彰
(三重大学大学院生物資源学研究所)

調査者・調査協力者（所属）【写真撮影】
青木優和（東北大学）【a,b】
神谷充伸（東京海洋大学）
倉島彰（三重大学）【c】
鈴木はるか（東北大学）【d,e】
田中次郎（東京海洋大学）
渡邊裕基（三重大学）【f】
上野綾子（WII）

高野治朗（筑波大学）
George Northen（筑波大学）
山根正太郎（筑波大学）
河口治斗・小坂大樹・
須田華代・相馬眞智・
出戸嵩人・山根稔夫
(東北大学)

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2025年度藻場調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/moba_2025.pdf)

これまでの藻場調査の報告書はこちら。
<https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
これまでの藻場調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_algalbeds.html

たけの 竹野サイト

- 兵庫県豊岡市 -

- ▶ 日本海の但馬海岸大浦湾に位置する岩礁海岸周辺にある藻場です。湾口部にある岩礁の内側で調査を実施しています。
- ▶ ホンダワラ類のナラサモ、ノコギリモク、ヨレモク、ヤツマタモク等の他、コンブ目のクロメ等の多様な種類の海藻が混生しています。



▲ 永久方形枠 AとB：真上から撮影した2つの枠内の様子です。ワカメが優占し、アカモクがわずかに混生しています。かつて優占していたクロメはほとんど確認できませんでした。

▲ 永久方形枠Fの調査風景：ヤナギモクやノコギリモク、ヤツマタモク等の大型個体が混生しています。

調査結果概要

調査サイト内には、6つの永久方形枠（A～F）を設置しています。毎年の調査では、永久方形枠内に生育する海藻の種類や被度を調べるとともに、岸から沖に向かって調査ラインを設定し、水深変化に沿った海藻の種類や被度を調べています。

今年度の調査において、かつてはクロメが優占する群落であった永久方形枠AとB（写真b）で、クロメの衰退が継続しており、ワカメが繁茂していました。クロメの減少傾向は、永久方形枠AとBのみでなく全ての永久方形枠で確認されました。また、永久方形枠C（写真c）とDでは、ヤナギモクが優占した状態が継続しており、被度も上昇していました。永久方形枠EとF（写真d）では、藻場の林冠部を構成するホンダワラ類の種組成に大きな変化は見られないものの、被度は低い状態が継続していました。



▲ ライン起点から7m付近のナラサモ群落：下草としてピリヒバが密生し、ヨレモクも生育しています。



▲ 永久方形枠 C：ホンダワラ類が混生しており、全体の被度も高い状態でした。優占しているヤナギモクをはじめ、ヤツマタモク、ノコギリモク等を見ることができます。

▲ ライン起点から30m付近のノコギリモク群落：底質の礫には、ヒライボなどの無節石灰藻が生育しています。



▲ 大浦湾全景：左手に調査ラインの起点となる平井島が見えます。

調査日 2025. 5. 8
サイト代表者：上井進也
(神戸大学内海域環境教育研究センター)

調査者・調査協力者(所属)
上井進也 (神戸大学) 【b,c】
寺田竜太 (鹿児島大学)
島袋寛盛 (水産研究・教育機構) 【a,d-f】

【撮影した写真】
永田昭廣 (滄海生物環境サポート) 渡部雅博 (兵庫県)
富岡弘毅 (滄海生物環境サポート) 星野雅和 (神戸大学)
富岡由紀 (滄海生物環境サポート) 大橋莉子 (鹿児島大学)
山本貴史 (滄海生物環境サポート)

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2025年度藻場調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/moba_2025.pdf)

これまでの藻場調査の報告書はこちら。
<https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
これまでの藻場調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_algalbeds.html



- ▶ 大阪湾と紀伊水道を結ぶ紀淡海峡の外海に面した岩礁海岸に位置し、調査地の海底の地形は緩やかに傾斜しています。
- ▶ 調査開始時の大形褐藻としては多年生のカジメとヤナギモクが優占し、一部に一年生のワカメやアカモク等が混生していましたが、ここ数年は多年生の種ではヤナギモクがほぼ消失し、カジメとヨレモクモドキが優占しています。



b

▲ 永久方形枠 A：真上から撮影した枠内の様子です。カジメの大型個体が密生しており、他の大型海藻はほとんど確認できません。



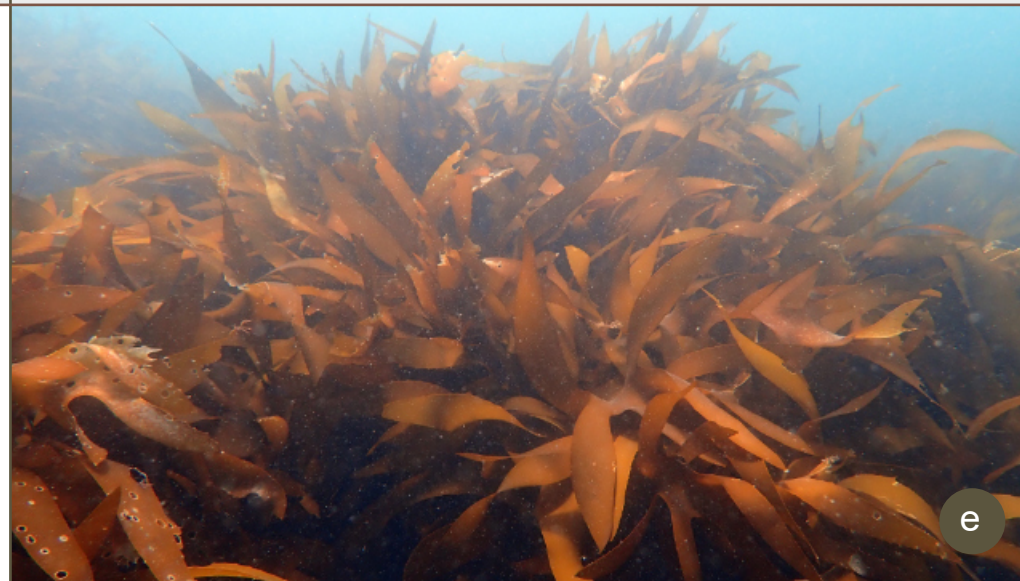
d

▲ 永久方形枠 E：真上から撮影した枠内の様子です。ワカメが優占しており、わずかにヨレモクモドキが生育しています。

調査結果概要

調査サイト内には、6つの永久方形枠（A～F）を設置しています。毎年の調査では、永久方形枠内に生育する海藻の種類や被度を調べるとともに、岸から沖に向かって調査ラインを設定し、水深変化に沿った海藻の種類や被度を調べています。

今年度の調査では、永久方形枠調査とライン調査で、2023年度まで優占していたヨレモクモドキ（写真c）の顕著な減少が見られました。その一方で、カジメ（写真b, e, f）やワカメ（写真c, d）の被度の増加が確認できました。とくに永久方形枠E（写真d）やFでは、ワカメが優占していました。例年度の調査と比べても下草の種組成や被度に顕著な変化は見られませんでした。ヤナギモクについては2024年度に続き今年度も記録されませんでした。



e

▲ カジメ：カジメの大型個体からなる群落です。



2 km
この地図は国土地理院地図を基に作成



a

▲ 調査地景観：ライン起点近くから調査海域を望む。



c

▲ 永久方形枠 Bの調査風景：ワカメ、ヨレモクモドキ（矢印）、カジメが混生しています。



f

▲ カジメの幼体：ワカメの根元にカジメの一年目の幼体（矢印）が生育していました。

調査日 2025. 5. 7
サイト代表者：上井進也
(神戸大学内海域環境教育研究センター)

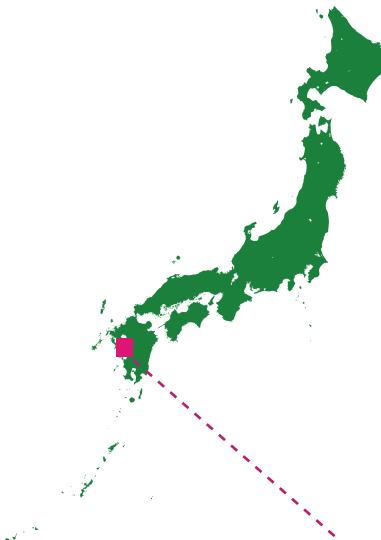
調査者・調査協力者(所属)
上井進也(神戸大学)【b-d】
寺田竜太(鹿児島大学)【a,e】
島袋寛盛(水産研究・教育機構)【f】
永田昭廣(滄海生物環境サポート)

【撮影した写真】
富岡弘毅(滄海生物環境サポート) 星野雅和(神戸大学)
富岡由紀(滄海生物環境サポート) 小林 格(神戸大学)
山本貴史(滄海生物環境サポート) 伊集盛人(神戸大学)
大塚正純(滄海生物環境サポート) 大橋莉子(鹿児島大学)

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2025年度藻場調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/moba_2025.pdf)

これまでの藻場調査の報告書はこちら。
<https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
これまでの藻場調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_algalbeds.html

薩摩長島サイト - 鹿児島県長島町 -



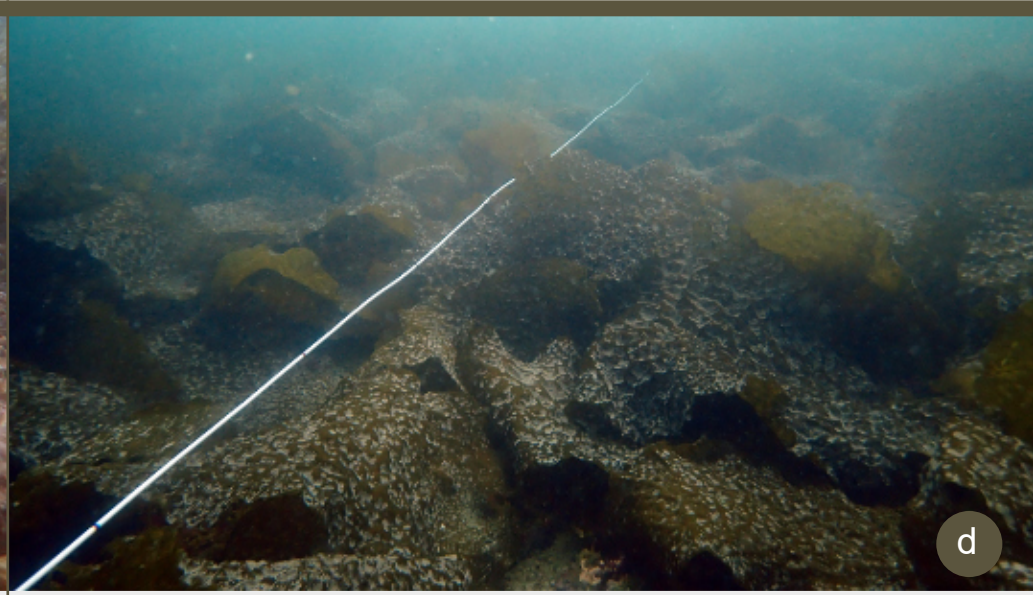
- ▶ 堂崎 (A) は、長島西部に位置し、東シナ海に面した岩礁です。また、諸浦島 (B) は、堂崎の北北東約12kmの八代海に位置する島の岩礁です。
- ▶ 後背地は、Aでは丘陵地、Bでは小高い森となっており、いずれも調査地周辺に直接流入する河川はありません。
- ▶ Aは、褐藻のアントクメ (コンブ目) が優占する藻場でしたが、2016年度以降、アントクメが見られない状態が続いています。
- ▶ Bは、漸深帯でアントクメが優占する藻場となっており、水深約-6mから-30mまで、海底を覆うように繁茂しています。



この地図は国土地理院地図を基に作成



▲ A (堂崎) 近くの褐藻アミジグサ科海藻の大群落：アントクメの藻場が消失したあとに、褐藻のアミジグサ科海藻 (シマオオギ、シワヤハズ、フタエオオギ等) が繁茂し、まるで藻場のような景観となっている場所もありました。褐藻のアミジグサ類は魚等の摂餌による影響を受けにくいとされています。



▲ B (諸浦島) サイトの景観：水深5mから20mまで、アントクメが優占する藻場になっています。今年度の調査でも例年通りの植生が確認されました。

調査結果概要

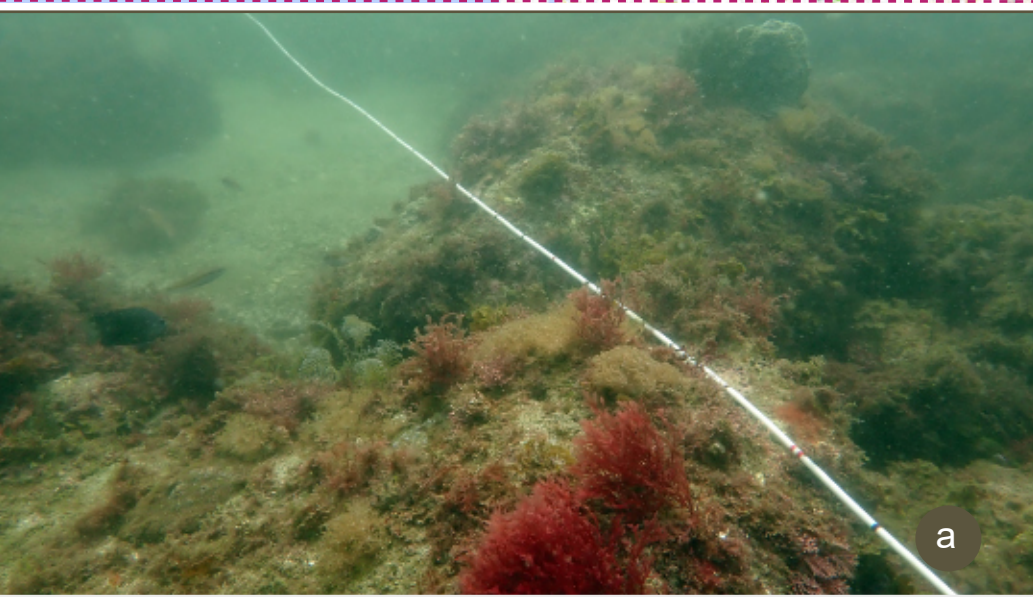
調査サイト内には、6つの永久方形枠 (A~F) を設置しています。毎年の調査では、永久方形枠内に生育する海藻の種類や被度を調べるとともに、岸から沖に向かって調査ラインを設定し、水深変化に沿った海藻の種類や被度を調べています。

東シナ海に面したA (堂崎) サイトでは、調査を開始した2008年度から褐藻のアントクメ (コンブ目) が優占する藻場が見られていましたが、2016年度の調査以降、アントクメが見られなくなりました。今年度の調査においても、Aサイトでは、アントクメは見られませんでした (写真a)。

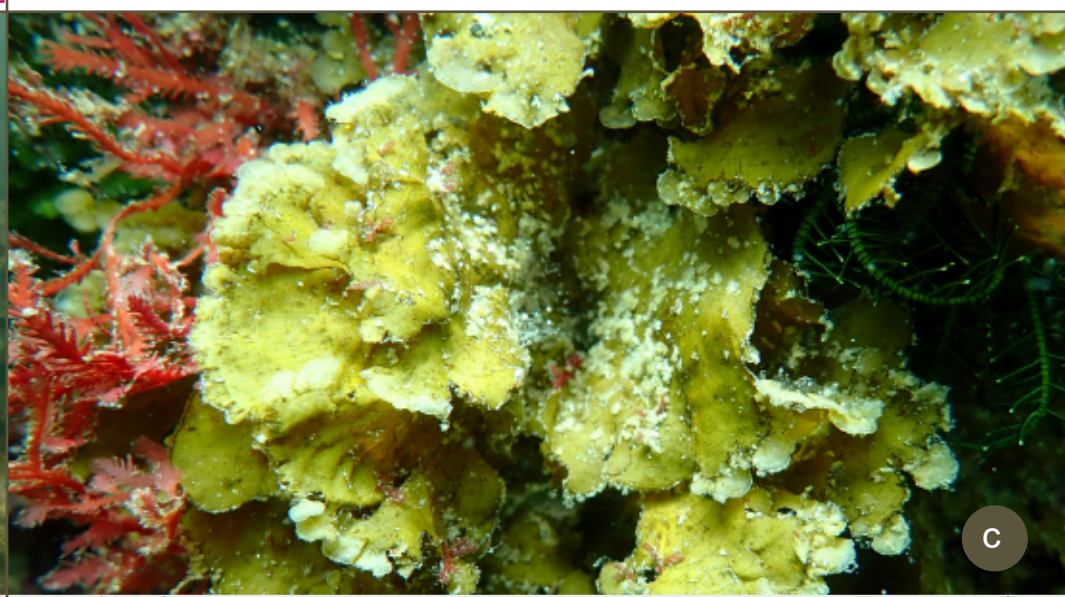
2021年度からモニタリングを開始した八代海内に位置するB (諸浦島) サイトでは、アントクメの高密度な群落が今年度の調査でも確認されました (写真d)。なお、Bサイト周辺海域では、アントクメの他、ヒジキやアカモク等のホンダワラ類のガラモ場 (写真e) も見られました。



▲ B (諸浦島) 周辺のガラモ場：Bサイト周辺の浅場には、ホンダワラ類のガラモ場が広範囲で見られます。



▲ A (堂崎) サイトの景観：アントクメの消失後は、小型の海藻類を中心として植生となっています。今年度の調査でもアントクメは確認されませんでした。



▲ A (堂崎) のシマオオギ：アントクメの消失後は、下草として生育していたシマオオギやフタエオオギ等の褐藻のアミジグサ類をはじめとする小型の海藻が、お花畑のように繁茂しています。



▲ B (諸浦島) で見られるキビナゴの群れ：藻場の周辺はさまざまな魚介類の暮らす場所となっています。Bサイトでは、鹿児島県の代表的な水産有用魚種であるキビナゴの群れも見られます。

調査日 2025. 4.30, 6.5, 7.4, 7.7(B)
8.19(A)
サイト代表者：寺田竜太
(鹿児島大学大学院連合農学研究科)

調査者・調査協力者 (所属) 【写真撮影】
寺田竜太 (鹿児島大学) 【a-f】 田中絢野 (鹿児島大学) 大海聡一 (鹿児島大学)
膳場智幸 (鹿児島大学) 松岡 翠 (鹿児島大学) 北さつま漁協長島支所
大橋莉子 (鹿児島大学) 尾上敏幸 (鹿児島大学)

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2025年度藻場調査速報 (環境省生物多様性センター)
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/moba_2025.pdf)

これまでの藻場調査の報告書はこちら。
<https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
これまでの藻場調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_algalbeds.html